

ベートーヴェン:「仕立て屋カカドゥ」の主題による変奏曲とロンド

作曲年代・動機は定かではないが、1824年にウィーンで出版された約18分の堂々たる変奏曲。荘重な序奏で始まり、アレグレットの明るい主題がピアノによってスタッカートで提示され、10の変奏を経たのち、最後は華々しく終わる。主題は、当時ウィーンで人気を博していたヴェンツェル・ミュラーのオペラのアリア「私は仕立て屋カカドゥ」から採られている。

スメタナ:ピアノ三重奏曲

このピアノ三重奏曲は、4歳で逝った長女ベドジーシカの早世に苦しむなか、1855年に書き上げられた。斬新というより、異様という言葉が似つかわしい。全3楽章がト短調で書かれているうえに、緩徐楽章を欠き、全ての楽章に急速なテンポ指定が与えられている。ソナタ形式の第1楽章は低音で悲痛な歌を奏でるヴァイオリン独奏で幕を開ける。半音階の旋律はバロック時代の「涙流るる」という音型だ。第2楽章ではロンド主題がポルカのリズムに乗って、哀愁漂う旋律を歌う。第3楽章では対照的な2つの主題が交差する。タランテラ風の激越な舞曲は、ボヘミア民謡「トウモロコシの種を撒いた」の引用。慰めに満ちた旋律は、ト短調のピアノ・ソナタ(1846)からの引用。コーダの直前でまた葬送行進曲が奏でられるが、まるで娘の天上での幸福を確信したかのように、このテーマが力強く輝かしく演奏され、最後は「トウモロコシの種を撒いた」のパッセージが楽しげに奏でられる。

シューマン:ピアノ三重奏曲 第3番

1850年、シューマンは家族とともにデュッセルドルフに移住する。本曲は1851年秋、わずか一週間で書かれたシューマン最後期の作品。ピアノ付き室内楽曲としては演奏機会が少ないが、3つの楽器の密な絡み具合や対位法的な書法の充実度など、シューマンの独自性が発揮された名作。全4楽章からなり、ソナタ形式の第1楽章は、ほの暗く流れるような第一主題に、旋律線がやわらかな光に包まれたような第二主題が続き、やがてチェロのピチカートが新たな局面を告げる。三部形式による第2楽章は、恍惚とした深い内面性と抒情性を感じさせる。チェロの短く刻むスタッカートで始まる中間部は、魂の深淵を覗かせるようなファウスト的性格を持つ。その後、再現される主題は、儚い美への鎮魂のように静かに消えていく。妻クララも感銘を受けたとされるスケルツォの第3楽章は、複雑に屈折した主題が3回繰り返されるなかにトリオが2つ挟まれる。第4楽章はソナタ形式によるフィナーレ。輝かしい第一主題で始まり、チェロとヴァイオリンが対話する第二主題、そして前楽章のトリオの旋律も現われ、有機的に絡み合いながら白熱した構成の妙を聴かせる。